

Title	モハンマド・ラマザーニーと『書物Ketāb』： 一九二〇年代のイランにおける書籍の出版状況をめぐって
Sub Title	Moḥammad Ramazānī and Ketāb : on book publishing in 1920s Iran
Author	爲永, 憲司(Tamenaga, Kenji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.78, No.1/2 (2009. 6) ,p.59- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20090600-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モハンマド・ラマザーニーと『書物 Ketāb』

——一九二〇年代のイランにおける書籍の出版状況をめぐって——

爲 永 憲 司

一 はじめに

一九世紀初頭以降における出版・印刷の本格的な導入と発展は近代化への要求と密接に関係し、その副産物であるとともに、イランの「近代」の形成に大きな役割を果たすものであった。⁽¹⁾ 皇太子アッバース・ミールザー治下のタブリーズで最初の活版印刷機が導入されて以来、イランの主要都市には印刷所が建設され、活版や石版によって書籍の印刷が進み、一八三七年には最初の新聞が発行されることになる。一八五一年のダーロール・フォーン Dar al-Fonun の設立はイランの出版文化の形成を前進させることになり、同校の教師や学生によって教科書の出版や翻訳が進展した。また、ガージヤール朝政府が設置した印刷局や翻訳局によって西洋の書物の翻訳、

ペルシア語やアラビア語の古典の出版が行われ、出版は主として政府の管理下に発展していくことになる。⁽²⁾ その後、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての教育制度の拡充、新聞発行の拡大、教育協会 Anjoman-e Ma'arif や書籍印刷会社 Sharkate Tab'eh Kotob と、いたガージヤール朝政府要人・官僚らによる文化的諸機関の設立と平行して、書籍の出版はさらに進展し、テヘランには書店街が形成されていく。立憲革命期には、基本法補則に出版の自由と検閲の廃止が明記され、さらに、出版法が制定されたことにより、書籍の出版や販売に関する法整備がなされた。その後、レザー・シャー期になると政府による検閲が強化される一方、テヘランでは書店数が増加していき、リテラシーの拡大とともに次第に出版文化が形成されていくのである。

本稿で取り上げるモハンマド・ラマザーニー（一九〇四—一九六七）は、そうした時代を背景に、一九二〇年代にテヘランで書店を開業し、出版文化の発展に大きく貢献した人物である。彼は生涯に五五〇点以上の書籍を出版し、四万点の書籍を購入したという。ゆえに、彼は「イランの書物の父 pedar-e ketābe-īrān」と呼ばれ、「書物 Ketāb」という言葉は彼の生涯に永遠に結びついている」と語られる。彼は一九三二・三三年に『書物』という、書籍の紹介を目的とする冊子を刊行した。⁽³⁾この冊子には一九二二年から一九三一年にイランで出版された書籍の目録が掲載されており、当時どのような書籍が出版され、どのような書籍に需要があったかを知ることができる。彼は出版人として、イランの近代出版文化史上にその名を残す人物であるが、日本や欧米においてその生涯と業績が紹介されることはなく、ペルシア語でも、彼が経営していたハーヴァル書店と『書物』についてのセイエド・フアリード・ガーセミーによる簡単な紹介がある⁽⁴⁾だけである。そこで、本稿では、モハンマド・ラマザーニーの生涯と『書物』について簡潔に説明を加えた後、『書物』の内容を通じて一九二〇年代から三〇年代初頭のイランの出版状況について分析する。戦間期イランの

歴史的展開については様々な視点からの先行研究があり、専門書や論文集も多数出版されている。⁽⁵⁾しかし、そこでは、いかなる書籍によって政治や経済や文化に関する当時の政策や言論の土台が形成されていたのかという点は看過されてきた。また、代表的な知識人に関する研究においても、彼らの主著だけが取り上げられ、彼らの知的形成の周辺に存在した書籍の多くは議論されることが少ない。同様に、イラン出版史研究においても新聞を中心とする言論への弾圧や検閲制度の変遷に焦点を当てる傾向が強い。そこで、本稿では先行研究において考察の対象とされてきた知識人の「言説」から「言説の周辺」に視点を移し、ラマザーニーの生涯と『書物』の分析を通じて、一九二〇年代の出版文化の普及における彼の貢献を評価した後、当時の知識人によって出版され、彼らの言説を取り巻いていた書籍の特徴を考察する。

二 モハンマド・ラマザーニーの生涯

モハンマド・ラマザーニーは、一九〇四年に書籍商の子としてテヘランに生まれた。⁽⁶⁾父ハーτζジ・ミールザー・アリー・アスガル（一八七一一一九三七）はカーシヤーン出身で、一九〇六年頃からテヘランのハーージェボ

ツドウレのティームチエ Timche-ye Hajeb al-Dowle で書店を創業した。⁽⁷⁾立憲革命期にはアラーク州のアンジヨマンの議長を務めたこともあり、当時の名士の一人であったという。⁽⁸⁾彼には四人の息子がおり、末弟のジャヴァードを除いてみな書籍商になった。すなわち、モハンマド、エブラーヒーム、マフムードの三名である。⁽⁹⁾幼少期の家庭環境について、ラマザーニーは次のように回想している。

「我々の家族の間では、書物は中心的な役割を果たしていた。私は子供の時分から書物に親しんだ。みなが父を本屋 ketabforush と呼んだからである。彼への電報の宛名も本屋 ketabforush となっていた。私自身も幼い頃から書物に対して多大の愛着と関心を抱いていた。⁽¹⁰⁾」

幼少期から書物への関心を深めていったラマザーニーは一九一六年にソルターニーエ学院 Madreseh-ye Sol-tāniye を、一九一八年に政治学院 Madreseh-ye Oltim-e Syasi⁽¹¹⁾を卒業した。その後しばらくの間、『シャファゲ・ソルフ Shafaq-e Sorh』紙などの校正をしながら書

モハンマド・ラマザーニーと『書物 Ketab』

店開業のための資金を蓄えた。彼の父は相当な額の財産を遺していたともいわれ、これを資本に文化活動に参入していったと思われる。⁽¹²⁾その後、彼は一九二〇年に私費を投じてファルマーン・ファルマー通りにエツテファール読書室 Qarā'atkhāneh-ye Etefaq を設立した。その時代に彼が最初に出版した書籍は、一九二一年のレザーザーデー・シャファグ『経済論集 *Majmū'eh-ye Eqtisād*』であった。一九二三年には、ナーセリーエ通りにシャルグ書店を設立し、そこから二年間で五十点の書籍を刊行した。父や弟も書籍販売業に従事していたため、一九二七年にシャルグ書店を弟マフムードに譲り、翌年、ハーヴァル書店を設立した。彼は、一般家庭に多くの書籍を届けるために、何度か書籍の「特売 *natā'*」を行ったといわれ、息子モフセン・ラマザーニーによれば、彼の功績の一つは「書物の大衆化 *marfūmī-kardān*」にあったとされる。⁽¹³⁾また、彼は新聞・雑誌や書籍の収集を行い、貴重なコレクションを築き上げた。モフセン・ラマザーニーは、これについても二つの思い出を語っている。⁽¹⁴⁾一つは、サーヴァーク SAVAK が何らかの理由で父の店を捜査したが、膨大な書物の山を前にして帰ってしまったという話。もう一つは、ある日、家を出た父が、途中で古

六一 (六一)

新聞を見つけ、それらの埃で服を真っ白にして持ち帰ってきたという話である。『書物』の発行にも、こうした日々の書籍収集の成果が活かされていたわけである。

彼は書籍の出版と並行して自ら定期刊行物の出版も行った。最初に出版したのは、一九二三年に第一号を発行した『テジャーラト *Tajarat*』誌であり、これは番号を出して休刊したが、その直後に『シャルグ *Sharg*』誌を発行した。文学・哲学・科学の研究と一般読者の啓蒙を標榜した『シャルグ』誌は通巻で四巻発行された。第一巻は一号きりで終わった。一年半の中断を挟んで再刊された第二巻も一号（一九二六年）を発行しただけであったが、四年後に再々刊された第三巻は計十二号（一九三一年）を出した。その間、第一巻では自ら編集人を兼務し、第二巻では編集人にナスロツラー・ファルサフィーを、第三巻ではサイド・ナフィースイーを迎え、誌面の充実に努めた。当時の著名な学者・文人が編集し、寄稿したため、今日でも同誌の文学的意義は高いといえる。⁽¹⁶⁾

また、『アフサーネ *Afsaneh*』という定期発行の小話集を刊行したことも彼の重要な業績の一つである。⁽¹⁷⁾これは読書文化の普及のために国内外の小説を掲載した小冊子で、形態は雑誌とも書籍ともつかない、その中間のよ

うなものであったという。⁽¹⁸⁾一九二七年から一九三一年まで三巻にわたって刊行され、外国文学の翻訳に加えて、サーデグ・ヘダーヤト、ボゾルグ・アラヴィー、ニーマー・ユーシージらの作品が掲載されたことはイラン近代文学史上において重要である。

こうした文芸誌の発行を通じて、ラマザーニーは多くの知識人と交流を持っていたのであるが、ハーヴアル書店自体も彼らの交流の場として機能していた。バグダードに生まれ、ガージャール朝の官僚として特にペルシア湾沿岸地方に勤務することの多かったモハンマド・アリー・ハーン・サデイドッ・サルタネが一九二〇年代末にテヘランを訪れた際の旅行記には、そうした交流の様子が細かく記されている。目的は書籍の購入や出版の交渉のためであることが多いが、そうした行動の中で書店という場を通じて様々な文学者や政治家と交流している。例えば、一九二八年七月から一九三〇年八月にかけて、彼が書店を訪れた日数は七〇日以上ある。⁽¹⁹⁾訪れていたのはテヘラン書店、ハーフェズ書店、アダブ書店、シャルグ書店といった当時のテヘランの有力書店で、学者や文筆家、国会議員、官僚、検察官、弁護士、ウラマーなど、様々な人々に会っている。これは、当時の知識人たちが

書店を通じて人間関係を形成していたことを証拠づけるものであり、そうした場の一つがハーヴァル書店であった。『書物』の発行は、このような書店を通じて築かれた人間関係を背景にしている。

第二次世界大戦後は、教科書の販売をめぐって政府及び教育省と度々衝突した。彼は、その当時の教科書価格が高いために一部の人々が満足な教育を受けられないというとして、教科書の値下げを政府に要求し、そのために警察に逮捕されたこともあった⁽²⁰⁾。また、テヘラン出版業者・書籍商組合 Eftekhāyeh-ye Nasherān va Ketābforūshāne Tehrān を創設して出版界の権利拡大と相互扶助のために活動⁽²¹⁾し、一九五七年には副理事長を、一九六〇年から一九六四年には理事長を務めた。晩年、本人の強い意志によってゴムの大モスク附属図書館に膨大な蔵書の一部を寄贈し、死後、彼が収集した新聞・雑誌のコレクションはテヘラン大学中央図書館に寄贈された。彼が書物とともに過ごした生涯を終えたのは一九六七年のことである。

三 『書物』の概要

『書物』は一九三二年（西暦一九三二年）から一九三三

年）にテヘランで発行された。この冊子はイランで最初の書籍に関する定期刊行物だと言われ、全四部から成っており、いずれも同じ年に三ヶ月ごとに発行されたものである。第五部まで発行されたものと推測されるがそれは収録されておらず、その後は続刊されなかったものとみられる⁽²²⁾。冊子自体の価格は四部で十リヤル、三〇〇部が印刷された。発行の範囲はテヘラン居住者のみを対象としたものではなく、ハーヴァル書店との取引規約に見られるように、地方の諸都市からの注文も想定されていた⁽²³⁾。発行の目的は、過去十年間にイラン国内外で出版されたペルシア語書籍の目録を作成して広く一般に伝え、良書の紹介を行うことであった。第一部冒頭には「書籍目録とは何か」という見出しで次のような文章が掲載されている。

「書物を愛する人々にとつて最も必要なことの一つは、ペルシア語で印刷され、出版された書物の総合的な目録を持つことである。それぞれの書店の出版物の数が最近十年間にイランで出版された書物の総数よりも多いような文明化した国々では、書物を求める者に不便がないように、総合的で有益な目録が存在する。

しかし、イランではそれぞれの書店の出版物が非常に限られた数であるため、苦勞して目録を準備しても評價されない。よつて、ただちにペルシア語の出版物のための総合的な目録を準備し、書物を求める人々の不便を取り除くことは期待できない。⁽²⁴⁾

彼はこのように現状を分析し、完全な目録作成の難しさを指摘しつつ、ペルシア語書籍目録の不在という読書人にとつての損失を埋め合わせるために、最近十年間にイランやイラン国外で出版された総合的な書籍目録を作成し、人々の利用に供したいという決意を述べている。さらに、次のような呼びかけをして、ペルシア語書籍に関する出来る限り多くの情報提供を求めている。

「我々は著者や出版者や書物を愛する人々に対して、自分が出版した書物から一冊を出来る限り速やかにハーヴァル書店に送つてくれるよう求める。この一冊に対して書籍目録四部、或いは、送られた書物と同じ価格のハーヴァル書店の出版物を彼らに送るつもりである。これは著者や出版者の出版物を紹介する最良の手段となろう。書物の提供を望まないのであれば、書名、

著者名、印刷所名、出版地、出版年月日に関する簡潔な説明を書き、我々のところに送つていただきたい。⁽²⁵⁾」

ここで彼が述べている「著者や出版者や書物を愛する人々」とは誰を指すのか、書籍の流通範囲が明らかになつていない現状では断定できない。「書物」に掲載されている書籍は、古典文学を除くほとんどが、ガージャー朝末期からバフラヴィー朝初期にかけての支配階級やウラマー、または官僚や文筆家や教師などの「近代的城市中間層」⁽²⁶⁾によつて執筆や翻訳が行われている点、当時、書籍は相対的に高価な商品であり、一定の購買力を有した階層以外は簡単に触れることができなかったと思われる点、⁽²⁷⁾民衆のリテラシーの低さ、⁽²⁸⁾ラマザーニーの個人的な人間関係などから、広義の知識人層のことを示すのではないかと推測するほかない。

目録の内容の検討は後に行うことにして、ここでは各部の特徴についての概略を述べることにする。第一部は四十頁で、過去十年間にハーヴァル書店が出版した書籍、過去十年間にイランで出版された歴史・地理書及びこれまで出版された雑誌の紹介に当てられている。まず、

冒頭にハーヴァル書店の紹介、先ほど述べた目録の説明、ハーヴァル書店による『シャー・ナーメ』の出版予告、『シャルグ』誌の紹介及び同誌への主要な寄稿者の紹介が行われる。歴史・地理書の項目及び雑誌の紹介部分を除くと、第一部は彼自身によるハーヴァル書店の十年間の活動の評価であり、また、同書店が出版した書籍の宣伝である。そのため、この部ではそれぞれの書籍の内容が簡潔に述べられており、それぞれが有する価値が強調されている。雑誌は全部で四四点に上り、便宜上、①政府系雑誌（一一点）、②一三二〇年まで発行が継続されなかった非政府系雑誌（二三点）、③一三二〇年まで発行が継続された非政府系雑誌（二〇点）、に分類されているが、アフガニスタンで発行された雑誌『カーボル Kābol』誌がテヘランで流通していた点は特に興味深い。

合冊になっている第二部は六十四頁で、過去十年間にイランで出版された詩集及び古典文学、倫理、教育、宗教、医療・健康、経済・農業、言語・辞書、法律といった様々な分野に関する書籍の目録が掲載されている。また、解説は付せられていないが、学年や科目に応じた教科書の一覧表が掲載されている。

第四部は四十頁で、そのすべてが過去十年間にイランで出版された小説、戯曲の紹介に費やされている。

次に、出版地及び印刷所に関して検討する。地方都市ではタブリーズ（四六）、エスファハーン（二八）、ラシュト（一九）、マシュハド（一六）、シーラーズ（一五）、ケルマーンシャー（八）、ハマダーン（二）、ホイ（二）、バーボル（一）という順に多い。アゼルバイジャンは一九三〇年代、レザ・シャーによる中央集権化政策の過程で経済的にも文化的にも抑圧されていたといわれるが³⁰、一九二〇年代にはタブリーズを中心にテヘランに次ぐ出版点数を誇り、地方都市の間ではいまだその文化的な地位を保っていたといえる。また、ベルリン（五一）、ボンベイ（二〇）、ナジャフ（五）、カイロ（四）³¹、ベイルート（四）、ハイダラーバード（三）、バグダード（二）、イスタンブル（一）といったイラン国外の諸都市で印刷された書籍も相当数流通している。特にベルリンが突出しており、立憲革命後に同市を拠点に形成された在外イラン知識人コミュニティの旺盛な文化活動を示している。しかし、目録に掲載されている書籍の圧倒的多数がテヘランで出版されていることから、出版界においても中央集権化が進んでいたといえることができる。ガージャ

ール朝以降の出版業の近代化はテヘランを中心とするかたちで進み、この分野においてはテヘランが地方に対する中央として形成されていったのである。

目録に記載されている印刷所は一一〇ヶ所以上あるが、印刷した点数では、ハーヴァル書店直属の印刷所を別にすれば、議会印刷局が六一冊と最も多くの出版に関わっており、バーゲルザーデ印刷所⁽³²⁾がそれに続く。その他二〇冊以上の出版に関わっている国内の印刷所は、エルミ、フェルドウスイー、サアーダト、タマツドン、ペロウヒームで、これらは当時の有力な印刷所とみなすことができる⁽³⁴⁾と同時に、それぞれ有力な書店の経営下にあったものである。こうした状況から、当時は、書物の出版、印刷、流通、販売がまだ分業化されておらず、書籍商がそれを一手に引き受けていたことが明らかにされる。

全体の冊数をまとめると、歴史・地理〃九九、詩集・古典文学〃一七〇、倫理・教育〃五五、宗教〃八八、医療・健康〃二八、精神〃一〇、経済・農業〃一〇、言語・辞書〃三四、法律・法令集〃四九、小説・物語・戯曲〃三二五、雑〃五四の合計九二二冊であり、他に、雑誌〃四四、『アフサーネ』の目次〃一八六、教科書〃一七六（ただし一三一年、つまり一九三一年から三二年

の出版分のみ）である。詩集・古典文学や近代小説といった文学関係の書籍は目録全体の半数を占める。これは『シヤルグ』誌の発行を企画したラマザーニーの個人的な関心を示すのみならず、一九二〇年代がイランの近代文学史上の一つの興隆期であったことを示すものである。

目録の記述方法については、書名、著者名、訳者名、出版年、出版地、印刷所、頁数、版型、販売価格などが基本的な情報として記述されており、場合によっては目次が列挙されたり、ラマザーニー自身による解説が付記されたりする場合がある。ラマザーニーの解説は、読書界に広く良書を普及させたいという意思に基づくもので、ハーヴァル書店が出版したものの以外の書籍にも偏りなく付けられている。

印刷方法については活版印刷によるものが圧倒的に多く、石版本は比較的少ない。石版印刷から活版印刷への転換は、この時期にほぼ成し遂げられている。ただし、詩集・古典文学、宗教書に関しては石版本が多く見られる⁽³⁵⁾。

また、『書物』の発行当時、詩集、小説、宗教書の一部にはすでに入手困難になっていることを示す記述

(nāyāb' kam'yāb)、あるいは完売されたという記述 (tamām shodch) がある。これは、当時の書籍の発行部数との関係上、個々の書籍が何部発行されたのかという点についての慎重な調査と分析から考えなければならぬ。石版本については三〇〇部から四〇〇部程度しか印刷ができなかったといわれており、この分野に石版本が多いことと関係しているとも考えられるが、必ずしも石版本にのみこうした記述があるわけではないので、文学書や宗教書に対する需要の大きさがある程度は示しているのではないかと思われる。なお、この目録に掲載されている書籍は再版である場合もあり、必ずしもこの時期に初めて出版されたものばかりではない。

四 一九二〇年代の書籍出版と知識人によるその受容

(一) 翻訳書について

翻訳書は詩集と法律以外のあらゆる分野に二五〇冊以上存在し、全体の四分の一以上を占める。ガージャール朝下の翻訳事業は、一九世紀以降の西洋列強の圧力に直面したイランの近代化への取り組みの一つとして、政府が後援する国家事業として行われた。その端緒をなすの

は、アッバース・ミールザーによるものであるが、より大規模な翻訳事業が行われたのはナーセロツ・ディーン・シャー時代である。翻訳を組織的に行う政府機関として翻訳局が設置され、西欧諸語、アラビア語、オスマン語による著作や新聞がペルシア語に翻訳された。その範囲は自然科学、軍事技術、医療、言語、歴史、伝記、旅行記、文学作品まで幅広い。また、ダーロル・フォアンでは、西欧諸国から招聘された外国人教師らが教科書を執筆したが、それに加えて、イラン人の翻訳官や学生らによつて、外国語による様々な分野の入門書や専門書が教科書としてペルシア語に翻訳され、附属の印刷所で印刷された⁽³⁸⁾。このようなガージャール朝の下での翻訳事業は、まさに彼らが輩出した高等教育機関の卒業生や西欧への留学生らによつて、その後飛躍的な進展を見せることになる。特に西欧近代文学の翻訳に関しては、翻訳者らが平易な文体を用いて翻訳することを意識したため、ペルシア語散文改革や表現形式に与えた影響が非常に大きい⁽³⁹⁾。同時に、それらが識字層にとつて読書への新しい誘因となった点も看過できない。モジュタヴァー・ミーノヴィーの回想によれば、彼は立憲革命期にジェイムズ・モーリア『ハジババの冒険』、アレクサンドル・

デュマ『三銃士』、『王妃マルゴ』、フランソワ・フェヌロン『テレマックの冒険』などを読んでおり、外国語から翻訳された新しい書物が家庭でも読者を獲得していたことがわかる。⁽⁴⁰⁾

まず、翻訳書の冊数が最も多い文学作品について検討する。ラマザーニーは「諸外国語からの翻訳小説 *român-häye tarjomeh az alsaneh-ye khareji*」と題する章を設けているが、まず、翻訳された作家について、最も作品数の多いフランスから見よう。著名な作者を列挙すると、モリエール、ベルナルダン・サン＝ピエール、コンスタン、アレクサンドル・デュマ、ユゴー、ウージェーヌ・シユール、アルフォンソ・カール、ジュール・ヴェルヌ、ポン・ソン・デュ・テラーユ、アナトール・フランス、ミシェル・ゼヴァゴ、モーリス・ルブラン、エーリッヒ・マリア・レマルクなどがある。一九世紀から二〇世紀にかけてのイラン文学に対するフランス文学の影響力の大きさはすでに指摘されているが、一九二〇年代にも高い人気を誇っていたことがわかる。それに対して、イギリス文学ではシェイクスピア、ドイル、ドイツ文学ではゲーテ、シラー、フェリクス・ダーンが挙げられているに過ぎない。また、「東洋小説 *român-häye*

Sharc」として西欧文学と区別されている国々の作者では、ロシア文学ではトルストイ、プーシキン、アラブ文学ではジュールジー・ザイダーン、ニークラー・ハッダーンが挙げられている。⁽⁴²⁾

作品の内容を見てみると、デュマ、ユゴー、シユールと言った一八四〇年代に流行したフランスの新聞小説の作家たち、及びそれらの系譜に入るゼヴァゴの『パルダヤン *Pardayan*』シリーズやテラーユの『ロカンボール *Rokānbāl*』シリーズが注目される。これらは歴史小説や冒険小説と呼ばれる一群の小説であり、その特徴は、英雄的な主人公を中心に、決闘や復讐、裏切りなどを交えたストーリーがめまぐるしく展開する点にある。その中でも特に翻訳文学の項の巻頭を飾り、一四作品（五八冊）が列挙されているゼヴァゴは代表作のほとんどが翻訳されており、その人気の程がうかがわれる。⁽⁴⁴⁾ ルブランのアルセーヌ・ルパンやドイルのシャーロック・ホームズといった探偵推理小説、ゴート族の民族移動を題材にしたダーンの壮大な歴史小説も高い人気があったようである。⁽⁴⁵⁾ この時期の著名な小説家の一人モシユフェグ・カークミールの回想録には、彼の周辺の若い文学青年らによるフランス文学の受容について興味深い記述が散見され

るが、第一次世界大戦中にはすでに『アスレ・ジャデー
ード *Asr-e Jadid*』紙においてゼヴァゴの小説を連載小
説の形式で読んでいる。⁽⁴⁶⁾ 当時のイランの文学青年たち及
び彼ら以前から文学活動を行っていた人々はこうした西
欧の大衆文学を受容し、それらの影響を受けて、歴史小
説や社会小説といった新しい文学を創造していったので
ある。それらは、ジャマルザーデの短編集『昔々 *Yek
hund yek nabind*』(一九二二年)に代表される「知識人
文学 *adbiyāte rowshanfekrāneh*」が徐々に活動を停止
していく中で多くの読者を迎え、次第に「大衆文学
adbiyāte ‘ammeh」を形成していったといえる。⁽⁴⁷⁾ また、
ジュルジー・ザイダーンやニークラー・ハッダードは、
いずれもシリア(現在のレバノン)出身のキリスト教徒
で、社会主義にも惹かれていた人々であったが、その西
欧文学に倣った啓蒙小説や歴史小説を量産し、当時非常
に人気があった。⁽⁴⁸⁾ イラン人小説家にとっては彼らも西欧
文学の手法を学ぶチャンネルの一つであった。

次にその他の分野での翻訳書の内容を見ていくことに
する。歴史書の翻訳は一九世紀に遡り、フランス史、ロ
シア史、イギリス史、インド史、チベット史、オスマン
朝史、ギリシア・ローマ史に加えて、普仏戦争などに関

する戦史、ルイ一四世、ルイ一五世、ナポレオン、ピョ
ートル一世、アレクサンドル一世、ニコライ一世、ヴィ
ルヘルム一世と言ったヨーロッパの国王やロシア皇帝の
伝記が翻訳されている。⁽⁴⁹⁾

『書物』に掲載されている歴史関係の翻訳書について
も、イランを訪れた軍事使節の回想録や旅行記、戦史な
どの占める比重が大きいということが出来る。しかし、
ラマザーニーが「世界史 *tavārikh-e ‘omūmī*」と分類し
ている項目では、一九世紀から二〇世紀にかけてのヨー
ロッパ史、アメリカ史、フランス革命、ロシア革命、第
一次世界大戦に関する西欧人の著作の翻訳が進み、立憲
革命を経験し、近代西欧との接触がさらに拡大したこと
を背景に、欧米の歴史に対するイラン人の関心の幅が広
がっていることがわかる。同時に、バルトリド『イラン
の歴史地理 *Joghriyā-ye Tārīkhī-ye Irān*』、ヘルツフェル
ト『ファールスの遺跡 *Ātlā-ye Shahr-e Pārs*』といった歴
史、地理、考古学分野における西欧やロシアのオリエン
タリストの著作が翻訳されている。ラマザーニーは、イ
ラン人自身が自国の歴史を知ることにおけるこれらの学
問的価値を称揚しており、これらの書籍を通じて彼ら自
身が自己のアイデンティティーを深めていく様子がわか

る。後に触れるイラン人学者による歴史研究も、一九二二年に設立された「国民遺産協会 Anjomane-Asāre Mellī」の活動を通じて密接な交流をもった彼らの多大な影響下に執筆されたものであった⁽⁵⁰⁾。

倫理の分野で注目すべきは、プラトン『ソクラテスの弁明』(翻訳された書名は『ソクラテスの哲理 *Hekmate Soghti*』、マルクス・アウレリウス『自省録』(翻訳された書名は『マルクスの教訓 *Pandameh-ye Markhs*』、サミュエル・スマイルズの諸著作(『品行論 *Akhlaq*』、『倫約論 *Sarfeni*』、『義務論 *Vazife*』など)、ギュスターヴ・ル・ボンの『民族進化の心理法則 *Naāms-e Rūhiyeh-ye Tahavvul-e Melal*』である⁽⁵¹⁾。宗教で英語によるイスラームの概説書(著者不詳)やフランスの天文学者カミーユ・フラマリオンの著作、経済では日本の絹に関する研究書が訳されている。翻訳書については、目録に掲載されているもの以外にも多くの著作が翻訳されていたと思われるが、いずれにせよ、一九二〇年代のイランでは、小説を中心に各分野での翻訳活動が前時代にも増して活発に行われており、当時の知識人による知識の受容と形成において翻訳が有していた重要性は明らかである⁽⁵²⁾。

(二) レザー・シャーによる近代化政策と書物
目録に掲載されている書籍はレザー・シャーによって推進された近代化の取り組みとその成果に深く関係していることがわかる。

まず、「軍事」という分類こそ行われていないが、各分野にそれに関係する書籍が相当数あることがわかる。軍最高評議会 *Shura-ye Ali-ye Nezām*、軍事学校 *Madārese Nezām* が出版を企画し、軍印刷局 *Mabāteh-ye Goshin* で印刷した書籍も散見され、国家及び軍が主体的にそれらの出版に積極的に関与していたことを示している⁽⁵³⁾。軍務省には翻訳局も設置され、そこで外国語の書籍が翻訳されていた⁽⁵⁴⁾。内容は、古代から近代にかけての戦史、イラン及び近隣地域におけるイギリスやロシアの軍事政策、イランやヨーロッパの軍事地理、イランに赴任した外国人将校の回想録、兵士の健康保持、馬術、軍用製図法、橋・鉄道建設、野戦や山岳戦の戦術、軍事関連語彙集など多岐に渡っており、彼らの関心の所在がうかがわれる。翻訳者の中にはジャンダルメリー学校出身者であるメフデー・ゴリー・アラヴァイー、フランスに留学し、砲兵学を学んだアブドッラー・ハーン・ヘダーヤト⁽⁵⁵⁾、一九二〇年代半ばに化学を学ぶためにフランスに送られ、後に

政府の軍事政策に合わせてサン・シール陸軍士官学校に転じた留學生の一人であるアフマド・ヴォスグがいる。⁽⁵⁸⁾その他、『日露戦争史 *Tarikh-e Nezami-ye Jange Rus va Zhabon*』、『露土戦争史 *Tarikh-e Jange Rus va Osmani*』を著したモハンマド・ナフジャヴァーンはティフリスのロシア系士官学校で教育を受け、一九二三年に幹部候補生学校長となり、一九二八年には参謀幕僚の一員となった人物であり、⁽⁵⁹⁾『レザー・シャー・パフラヴィー―皇帝陛下の歴史 *Tarikh-e Shahanshahi-ye Aghazate Reza Shah Pahlavi*』を著したアブドッラー・タフマースピーはコサック士官学校の卒業生で、一九二〇年代に戦争大臣や公共福祉大臣を務めた軍人である。⁽⁶⁰⁾このように、レザー・シャー体制の下で進められた国軍の創設に向けた取り組みの中で輩出された幹部将校によって、分野にまたがる軍事関連の書籍が生み出されていったのである。また、アブドッラー・タフマースピーのような軍首脳によって執筆されたパフラヴィー朝初期史では、一九二一年のクーデターからガージャール朝の廃絶、パフラヴィー朝の樹立に至るまでのレザー・シャーの事績が公文書や議会議事録を典拠に顕彰されており、この書物は宮廷・官僚・軍・議会が一体となって支えたレザー

ィ・シャー体制の精華といえるものである。このような書籍の叙述の分析によって、体制側がどのようなレザー・シャーのイメージを知識人に植え付けようとしていたのかが明らかになると思われる。

歴史や地理でも新しい書物が出現している。近代西洋と接触した一九世紀末から二〇世紀初頭の改革論者の思考において、近代への覚醒は同時に失われた古代イランの栄光の復興という「民族的」な意識をもたらした。そうした歴史への関心は一九世紀西欧のオリエンタリス卜らの強い影響を受けつつ、従来の王朝史の伝統とは異なる歴史叙述を出現させた。⁽⁶¹⁾それは、立憲革命を経て、「大衆 (udeh)」あるいは「国民 (melat)」による「専制 (estebdat)」との闘争という「大衆的 (populist) 歴史叙述」の出現へと繋がっていくのであるが、しかし、革命の挫折と第一次世界大戦の影響による国内の混乱に深い失望感を受けた知識人らはそれまでの歴史的過程によって顕在化していった「古代礼賛的なナシヨナリズムの潮流」⁽⁶²⁾を継承しつつ、次第に政治から分離した古代の歴史や文学の研究へと向かっていった。『書物』が扱っているのはまさにそうした時期であり、歴史書の出版点数の多さはそうした知識人らの意識を如実に反映している。ラマ

ザーニー自身も歴史書には相当の関心があつたようで、文学と並んで内容の解説が最も丁寧に付けられている項目である。

ハサン・ピルニヤー『古代イラン *Iran-e Bastani*』、セイエド・ハサン・タギーザーデ『パルヴィーズからチャングーズまで *Az Parviz ta Changiz*』、テイーンシャー・イーラーニー『古代イランの倫理 *Akhlaq-e Iran-e Bastan*』に代表される古代史研究、アフマド・キャスラヴィー『無名の王者たち *Shahriyāne Gonnām*』に代表される地方史研究は、いづれもラマザーニーがその重要性を特筆しており、⁶⁴ こうした古代史や地方史への関心が際立っている。また、「イラン偉人伝 *tarikh-e bozorgān-e Iran*」という項目ではレザー・シャーの業績を称賛する書籍が最初に挙げられている。ラマザーニーによる体制への配慮を如実にうかがわせる⁶⁵ ところだが、同時に、彼が政治の表舞台に登場する前後の過程で敗北していたモハンマド・タギー・ハーン・ペスヤーンやモハンマド・ヒヤーバーニーの伝記が挙げられている。いづれもベルリンで出版されたものであり、立憲革命後、同地に活動の拠点を移した立憲主義者らによって編まれたものと推測されるが、ラマザーニーは彼らをナシヨナリスト

として評価し、有益な書籍として推薦している。⁶⁵ また、アフガーニーの名で知られるセイエド・ジャマールロッデーイン・アサダーバーディーを「イランとイスラームの誇りであり、世界の偉人の一人」⁶⁶ と評価し、彼の伝記もあらゆるイラン人が読むべき書物として紹介している。

一方、ナスロッラー・ファルサフィー『一九、二十世紀の世界史 *Tarikh-e 'Omūmī dar qorūn-e 19 va 20*』のよ⁶⁷うなイラン人自身による「世界史」の著述もなされている。

また、地理書にはマスウード・ケイハーン『イラン地理詳細 *Joghgrāfiyā-ye Mofassal-e Iran*』、ソルターン・バハールマスト『イラン軍事地理 *Joghgrāfiyā-ye Nezāmi-ye Iran*』などがある。出版点数こそ少ないものの、ラマザーニーは地理書に強い関心を示しており、レザー・シャーによって国内の道路建設が進められていた時代状況を背景に、イラン人自身が自国の地理について知識を深めておくことの重要性を指摘する。⁶⁸ ハーツジー・ミールザー・セイエド・アリー・ジェナーブ『イスファハーン旅行案内 *Rahbarāye Mosferān-e Esfahān*』のような旅行案内書と思われる書籍も出版されている。

その他、歴史書の最後には、「年鑑 *sānāneh*」や「暦

taqvim」の類が六冊挙げられている。暦の出版は一九二五年の暦改革法制定前後における暦への関心の高まりを示しているとも思われるが、それは単なるカレンダーではなく、年鑑と同様に、その年の社会や文化に関する情報を豊富に含んでいる。これらはレザー・シャー期の貴重な研究資料として今後注目されるべき書物であろう。⁽⁶⁾

医療や健康に関する書籍の主題としては、マラリヤや結核といった伝染病、淋病や梅毒といった性病、水、運動法に関するものがある。都市部の発展と社会の産業化の進展に伴って、様々な衛生上の問題が発生した一九二〇年代は、教育の拡充によって近代西欧の科学に関する知見を獲得した人々が、「身体」の健康と「精神」の健康について真剣に考察を始めた時期であり、それに関連する書籍の出版が行われたものと思われる。性病は、第一次世界大戦中における諸外国の軍隊の駐留によって以前に増して蔓延し、さらに、売春の増加によって感染者が拡大したと当時の人々に信じられており、特に西欧留学によって医学を修めた人々を中心にその弊害が指摘され、予防策が検討されていた。⁽⁷⁾これらの書籍の出版は、彼らの危機意識の反映と考えることができる。また、そうした「身体」と「精神」の健全化のために屋外での運

動が奨励され、同時に、「民族主義的」な文化政策の一環として各種の体育行事が導入されていた。⁽⁷⁾運動法に関する入門書、バレーボールやバスケットボールといった個別競技の効用を説いた書籍の出版もそうした風潮に関連するものと推測される。

「精神」の健全化に関係が深い項目として教育・倫理分野の書籍があるが、それらが目録に占める割合は比較的高く、五五冊ある。教育関係の指導書、オスマン朝における教育、一般的な道徳書の類、古代イランの帝王の事績からの教訓書などがある一方、女性の社会的地位、女子の健康保持、女子教育、家政学、家庭教育など女性をめぐる社会問題、教育問題を扱う書籍が数多く存在する。レザー・シャー期には女子教育が進展を見せるとともに、国家の構成要員として女性の重要性が認められ、彼女たちに関する議論が活発化していることがわかる。⁽⁸⁾また、イラン社会の欠陥や後進性の原因を倫理的な観点から検証しようとする書籍も出版されており、例えば、ハビーボッラー・アームーゼガル『社会改革 *Estahdat-e Ejtima'i*』、モスタシャモツ・サルタネ『我々の不幸の原因とその解決 *E'ale-Badbaht-i-Ma' va 'E'af-e-an*』、レザーザーデ・シャファグ『救済の道 *Rah-e Rahat*』に

見られるように、倫理という分野はイランの国民国家形成や近代化と密接不可分な関係を有していたといえ、こうした書物の読解により、倫理と社会改革の関係性をめぐる知識人の思想的営為が跡付けられると思われる。

宗教書は、ウラマーによる著作がほとんどであるが、「諸宗教に対する反駁 *Kotobe-radd bar adyan-e mokrateteh*」と題された項目があり、一五冊が挙げられている。これらはキリスト教やユダヤ教、バハイイ教を批判する内容である。その他、ゾロアスター教関連の書籍が二冊ある。

経済・農業関係の書籍の総数は少ないが、貨幣論や銀行論、当時のイラン経済の現状分析などがある。また、牛の飼育、養蚕、造園、柑橘類の栽培など、実用的見地から出版されたと考えられる書物も存在する。経済学は一九二〇年代に西欧に留学した若者たちにとっても、経済学は関心の的であった。⁽⁷³⁾したがって、ここに挙げた以外に多くの書籍が出版されていた可能性もあるが、経済思想は最も研究が不足している分野であり、これらの書籍の分析を通じてそうした現状の打開が期待される。⁽⁷⁴⁾

法律関係書の中心は第一議会から第七議会までの法令集や法典類であるが、議政政治、財政法、民法、刑法、

商法、裁判、登記に関する解説書も出版されており、一九二七年の世俗化に向けた司法改革に至る過渡期における法律分野の専門家の育成や一般的知識の普及に向けた努力の痕跡が残されている。⁽⁷⁵⁾

辞書や外国語学習の手引きといった語学書は、目録の中でも相対的に高価な商品である。辞書は、ペルシア語辞書が二巻本で収録語彙数が一八四四四語のモハンマド・アリー・ヒヤーバーニー編『*Uvba-hal* 辞典 *Farhang-e Nowbahar*』を筆頭に四種類、ペルシア語と外国語(英語、フランス語、ロシア語、ドイツ語、エスペラント)の対訳辞書が十種類あり、外国語の自習書はフランス語が四種類、ロシア語が二種類、英語が一種類、エスペラントが一種類となっている。ペルシア語辞書は出版点数も少ないが、それに比べて、外国語学習に不可欠である辞書や学習書は豊富に出版されていることがわかる。西欧諸語を中心とする外国語学習熱が高まっている知識人の間では、ペルシア語の辞書よりも、諸外国語の辞書や学習書の方が需要が大きかったといえるのではないだろうか。

また、雑書の扱いになっているが、顕微鏡、無線に關する書籍や、ラジウムや電子、陽子の説明を行った化学

や物理学に関連する書籍がイラン人自身によって著されており、近代西洋科学の咀嚼の成果と見ることができよう。

(三) 文学書、教科書について

『書物』には、イラン人自身による近代小説七一冊が挙げられているが、すべて大衆文学である。ラマザーニーはそれらを「外国の小説の方法によって」現代の作家たちが執筆した小説と規定し、同時代人もそれらが外国文学の影響を多分に受けて書かれたものと認識している。彼は小説の内容に基づいてそれらを分類しながら紹介しているが、ほとんどの作品が歴史小説、社会小説、恋愛小説、道徳小説のいずれであり、多くがそのいくつかの性質を同時に備えるものとして紹介される。実際、ここに挙げられているのはイラン近代文学史において歴史小説や社会小説として著名な作品ばかりであり、モシユフ・エグ・カーゼシー『恐るべきテヘラン *Tehran-e-Mak-huf*』、アツバース・ハリリー『暗黒の時代 *Rizgā-e-Siyāh*』、アリー・ダシュティアー『牢獄の日々 *Ayyām-e Mahbas*』、ラビー・アンサーリー『人類の罪業 *Jenāyat-e Beshkar*』、モハンマド・ヘジャーズィー『ホマー

モハンマド・ラマザーニーと『書物 *Ketāb*』

Homā』、ラヒームザーデ・サファヴィー『シャフル・バーヌー *Shahr-Bāni*』、ヘイダル・アリー・キャマリー『トルカーン・ハートウーンの暴虐 *Mozālem-e Turkān Khātin*』などがこの時代を代表する小説である⁽²⁾。

指摘しておくべきことは女性が主人公であったり、作中の重要人物であったりする作品が非常に多いということである。これは、当時、特に社会小説の作者であった知識人を中心として、女性の社会的地位や境遇の改善を求める動きがあったことと連動している⁽²⁾。イランの近代小説は、伝統的な社会や文化への批判とともに、近代的都市生活において発生した諸問題への批判という両義性を備えた文学として展開していったと考えることができる。また、多くの作品が最初に新聞に掲載された後、あらためて単行本に纏められたもので、フランスを中心とする新聞小説の影響は小説の内容と同時に発表形態にも及んでいることが確認される。作者の多くが新聞や雑誌の発行に参加した経験の持ち主であったことにも関係しているよう。こうした点から、当時のイラン人小説家にとって、西欧文学の翻訳書の影響は非常に大きなものであったといえる。

一方、長年にわたって「第三階級 *tabaqeh-seyyom*」⁽³⁾

の間で広く読まれた書物である。ラマザーニーが述べている「物語 *qasṣa*」は、当時の識字層の間では徐々に需要が衰えていったと考えられる。「物語」には「口承・書承文芸に由来する通俗ロマンス」が多く、「伝統的な口承文化と近代的な出版文化との橋渡し役」として重要視されており、民衆の間で非常に人気のある読み物であった。⁽⁸¹⁾『書物』には、『アレクサンドロスの書 *Eskandarnāmah*』⁽⁸²⁾、『ハムザの秘密 *Romāze Hamzah*』⁽⁸³⁾、『千夜一夜物語 *Alife layl*』⁽⁸⁴⁾、『アミール・アルサラーン *Amir Afsalan*』⁽⁸⁵⁾、『クルドのホセイーン *Hoseyn-e Kurd*』⁽⁸⁶⁾、『ロスタムの書 *Rostamāneh*』⁽⁸⁷⁾、『四人の托鉢僧 *Chahār Darvīsh*』⁽⁸⁸⁾、『宝石商サリーム *Salīm-e Jawāherī*』⁽⁸⁹⁾、『鸚鵡四〇話 *Chehr Yūz*』⁽⁹⁰⁾、『盗賊と法官 *Dozd va Qāzī*』など三四冊が挙げられている。しかし、こうした書籍の需要にも多少の変化の兆しがあったことをラマザーニーは指摘している。例えば、『アミール・アルサラーン』について、「民衆の間に広まった最も有名な物語の一つで、年に一度は印刷されていたが、近年はそれに対する民衆の関心が薄くなり、過去十年で四度印刷されただけであった。」と述べている。⁽⁹¹⁾これはイラン人による大衆小説が普及を見せ始めたこと、読み物としての「物語」に対する人々の関心が

大衆小説へと移っていく過程を示しているのかもしれない。⁽⁸⁴⁾

戯曲は二二冊出版されている。イラン人による作品が多数を占めているが、マルコム・ハーン、ハサン・モガッダム、アブドル・ラヒーム・ハルハリー、グレゴール・ヤギーキヤーン、サーデグ・ヘダーヤト、ミールザード・エシユギーらはいずれもイラン演劇史を語る上で欠かせない人々である。扱った主題は古代イランから現代まで様々であり、形式も喜劇から悲劇までであるが、「本書は愛国心の涵養に益する」という解説が付されており、一般大衆へのイラン・ナシヨナリズムの植えつけに対する戯曲への期待がいかにあったかが読み取れよう。実際、一九二〇年代はイランにおける演劇の興隆期であり、グランド・ホテルの大広間等を舞台にいくつかの文学協会やコーカサスの劇団による演劇の上演が行われる一方、様々な演劇協会の設立が盛んであった。地方都市ではラシュトから出版された書物が最も多いが、これは同市がテヘランに次ぐ演劇活動の中心であったためでもある。⁽⁹²⁾このようなイラン人による新しい文学の興隆の陰に、アールフ・ガズヴィーニーやイーラジ・ミールザーら同時代の著名詩人による詩集、フェルドウスイー、ハーフ

エズ、サアデイーといった古典詩人の詩集が根強い人気を誇ったことも忘れてはならない。

最後に一七六冊ある教科書について簡単に触れておきたい。初等学年用と中等学年用に分けられており、科目は、初等学年が読み書き(一一二)、算数(二二二)、歴史・地理・自然科学・保健(七)、作文(九)、イスラームの教え・アラビア語(二二二)、中等学年が読み書き(一〇〇)、算数(三六)、歴史・地理(一七)、科学史・物理・化学(二二二)、イスラームの教え・アラビア語(一五)である。他に、女子のための教科書(五)、教師の指導用参考書(一)がある。教科書の点数は一年分であることを考えると相当大きな比重を占めているといえる。これは、ガージヤール朝下における近代的な教育制度の拡充に続くレザー・シャー時代の教育政策の下で、教科書が書店の扱う主要商品として浮上していたことを裏づけるものである。特に、立憲革命以降になると教科書をめぐる書店間の裁判が発生するようになり、政府と書店の間でもその取り扱いをめぐる様々な議論が行われた。⁸⁶⁾一九二八年には教育大臣ガラーグズルーによって教科書が国定化され、全国の小学校で使用が義務づけられた。⁸⁷⁾こうした措置により、国定教科書の出版を請け負った書籍出版

業者は発展期を迎えることになったのである。⁸⁸⁾ラマザーニーはそうした経緯を背景に、次のように述べている。

「いまだに議会印刷所による、教育省の特別の活版を用いての二、三の特定の書店のための教科書出版の独占は解消されていない。このため、教科書は活版の老朽化や紙質の悪さその他によって、次第に従来のような水準に戻っていくであろう。第五、第六学年でも、地理や歴史の教科書が印刷された。しかし、それらの印刷が非常に美しいものであるにせよ、地理教科書の価格の高さは一般の人々にとって耐え難いものであり、歴史教科書も高価である。ところが、これよりも安い価格で販売することはできるのである。さらに私は希望する。学生たちの苦労の原因にならないようなやり方でそれらの出版の独占を特別な書店に委ねることを。そうすれば、次第にこのような欠点は解消され、第五、第六学年の読み書きや数学の教科書の出版によって、初等学年の生徒たちは完全に安心することができるのである。」⁸⁹⁾

第二次世界大戦後に教科書価格の値下げを政府に要求した彼の問題意識の萌芽がこの発言に示されている。政府と一部の書店による独占的な教科書出版の在りようとそれに対する書籍商としての批判がこめられていると解釈できよう。

五 おわりに

モハンマド・ラマザーニーは、読書室の開設や書店の経営、書籍目録の作成といった営みを通じて、近代イランにおける出版文化の形成の一端を担った。こうした貢献は「イランの書物の父」と呼ばれるに相応しいものであったとすることができる。彼が作成した『書物』の目録は、一九二〇年代のイランが迎えた出版文化の興隆期の諸相を描き出している。一般的には出版に対して厳しい抑圧が加えられたとされるレザー・シャー期だが、厳しい検閲を受けていたとされる新聞や雑誌とは対照的に、多種多様な書籍が流通していた。古典文学や宗教書が依然として高い需要を保っていたものの、翻訳の受容を経て次第に新しい内容の書物が出現し、それらは様々な分野でレザー・シャー期の近代化に向けた知識人の思想的潮流と深い関係を有していた。しかし一方で、もし、

『書物』に掲載された書籍が出版法や検閲に抵触しない書物だと考えることができるとするならば、この「罰せられることのない書籍」の羅列は、言論・出版の自由が甚だしく制約されていたレザー・シャー期の出版界の本質を示すものなのかもしれない。

今後は、ラマザーニーの残した多種多様な書物の分析を通じて、レザー・シャー期の文化に関する考察がよりいっそう行われなければならないと考えるが、そのためには『書物』に掲載された書籍の収集が必要となる。また、書籍の流通経路、書籍商の活動、読者層の分析、出版と検閲の関係などは史料的な制約もあり十分な考察を行うことができなかつたので将来の課題としたい。

参考文献

- 岩見隆 2006 「カージャール朝期の印刷」『東洋文庫書報』37, pp. 1-25.
 小倉孝誠 2004 『バリの秘密』の社会史…ウージェエヌ・シユールと新聞小説の時代』新曜社。
 桜井啓子 1991 「レザー・シャー期イランの体育行事—その成立過程と役割」『オリエンツ』33/2, pp. 65-78.
 桜井啓子 1999 『革命イランの教科書メディア…イスラームとナシヨナリズムの相克』岩波書店。

- 八尾師誠 1998 『イラン近代の原像 英雄サッタール・ノー
ンの革命』東京大学出版会・
- 藤元優子 2006 「イラン大衆小説の歩み」『イラン研究』1, pp.
118-134.
- 吉村慎太郎 2007 『ハジャー・シャー独裁と国際関係』広島大
学出版会・
- Āryānpūr, Yalyā. 1382Kh. *Az Sābā tā Nīmā : tārīkh-e 150 sāl-
e aadbe-fārsī*. 3 vols, Tehrān : Zavvār.
- Āshbeqdarī Mard-e Īrān. 1380Kh. "Āshbeqdarī Mard-e Īrān..."
Qāsemī, Seyyed Farīd (ed.). *Keāb*. Tehrān : Nashr-e
Markaz, pp. 29-38.
- Āzarang ' Abd al-Hoseyn and ' Alī Dahbāshī (ed.). 1382Kh.
Tārīkh-e Shafāhī-ye Nashr-e Īrān. Tehrān:Enteshārā-e Qo-
qnūs.
- Abdī Kamyar 2001. "Nationalism, Politics, and the Develop-
ment of Archaeology in Iran," *American Journal of Archae-
ology* 105/1, pp. 51-76.
- Abrahānian, Ervand 1982. *Iran Between Two Revolutions*.
Princeton : Princeton University Press.
- Adamiyat, Ferīdun. 1971. "Problems in Iranian Historiogra-
phy," Thomas M. Ricks (tr.) *Iranian Studies* 4/4 pp.132-
157.
- Ashari, Mohammad Reza. 1993. "The Historians of Constitu-
tional Movement and the Making of the Iranian Populist
Tradition," *International Journal of Middle East Studies*

25/3, pp. 487-492.

- Albin, Michael W. 1986. "The Iranian Publishing Industry : A
Preliminary Appraisal," *Libri* 36/1, pp. 1-23.
- Ansāri, 'Alī Mir. 1383Kh. "Morāte'eh-ye Hoqūqī-ye miyān-e
Do Keābforūsh," *Keābforūshī : yādānāmeḥ-ye Bābak Ašhār*.
'Abd al-Hoseyn Āzarang et. al (eds.) Tehrān : Nashr-e
Shahāb-e Sāgeḥ, pp. 637-658.
- Araste, Reza. 1969. *Education and Social Awakening in Iran
1850-1968*. 2nd ed., Leiden, E. J. Brill.
- Bakāy, Christophe. 2001. "FRANCE V. FRENCH LITERA-
TURE IN PERSIA," *Encyclopaedia Iranica*, vol. 10, pp.
154-156.
- Brugman, Jan 1984. *An Introduction to the History of Modern
Arabic Literature in Egypt*. Leiden, E. J. Brill.
- Clawson, Patrick. 1993. "Knitting Iran Together : The Land
Transport Revolution, 1920-1940," *Iranian Studies* 26/3-4,
pp. 235-250
- Cronin, Stephanie. 1997. *The Army and the Creation of the
Pahlavi State in Iran, 1910-1926*. London & New York :
Tauris Academic Studies.
- Dadkhah, Kāmran M. 2003. "From Global Capital to State
Capitalism : The Evolution of Economic Thought in Iran,
1875-1925," *Middle Eastern Studies* 39/4, pp. 140-158.
- Eqbāl, Jawād. 1383Kh. "Keābforūshī," *Keābforūshī : yādānāmeḥ-
ye Bābak Ašhār*. Tehrān : Nashr-e Shahāb-e Sāgeḥ, pp. 95-
115.

- Ettchād, Hūshang. 1380Kh. *Pazhūshchgārān-e Mo'āser-e Irān*. vol. 3. Tehrān : Farhang-e Mo'āser.
- Golbon, Mohammad. 1383Kh. "Dāneshmandān-e Ketābforūsh va Ketābforūshān-e Dāneshmand" *Ketābforūshī : yāhāneh-ye Bābak Ašūr*. Tehrān : Nashr-e Shahāb-e Sāqeb, pp. 491-500.
- Honar, 'Alī Mohammad. 1383Kh. "Ketābforūshī-hā-ye Pātūq," *Ketābforūshī : yāhāneh-ye Bābak Ašūr*. Tehrān : Nashr-e Shahāb-e Sāqeb, pp. 687-698.
- Jalālī, 'Ayn Allāh. 1383Kh. "Chahār Nasr-e Nāsher," *Ketābforūshī : yāhāneh-ye Bābak Ašūr*. Tehrān : Nashr-e Shahāb-e Sāqeb, pp. 229-234.
- Kashānī, Nāder Maḥabī. 1383Kh. "Ketābforūshān-e Tehrān dar sāle 1306," *Ketābforūshī : yāhāneh-ye Bābak Ašūr*. Tehrān : Nashr-e Shahāb-e Sāqeb, pp. 603-608.
- Kashani-Sabet, Firuzeh. 2005. "Patriotic Womanhood : The Culture of Feminism in Modern Iran, 1900-1941," *British Journal of Middle Eastern Studies* 32-1, pp. 29-46.
- Martin, William H. and Sandra Mason. 2006. "The Development of Leisure in Iran : The Experience of the Twentieth Century," *Middle Eastern Studies* 42/2, pp. 239-254.
- Marzolph, Ulrich. 2001. "Persian Popular Literature in the Qajar Period," *Asian Folklore Studies* 60/2, pp. 215-236.
- Menashri, David. 1992. *Education and the Making of Modern Iran*. Ithaca and London : Cornell University Press.
- Mimovī, Mojtabā. 1383Kh. *Pānzah Goftār : darbāreh-ye chānd tan az reziāle adabe Urūbā : az Ūmūrīs tā Bernāld Shā*. 2nd ed., Tehrān : Enteshāāt-e Tūs.
- Mohammadi, Majid. 2008. *Judicial Reform and Reorganization in 20 th Century Iran*. New York and London : Routledge.
- Mostafā Moshfeq Kāzemi. 1350Kh. *Rūzgār va Andīshahā*. vol. 1. Tehrān : Ebn-e Sīnā.
- Naḥsī, Sa'īd. 1384Kh. *Beh Reuziyate Sa'īd Naḥsī : khāterāt-e siyāsī, adabī, javānī*. 'Alī Rezā E'temād (ed.), 2nd ed., Tehrān : Nashr-e Markaz.
- Navabpour, Reza. 1996. "The 'Writer' and the 'People' : Jamāl-zādeh's *Yekī Būd Yekī Nabūd* : a Recast," *British Journal of Middle Eastern Studies* 23/1, pp. 69-75.
- Nūrbaḥshī, Mas'ūd. 1381Kh. *Tehrān beh Rauziate Tārīkh*. vol. 4. Tehrān : Elm.
- Qāsemeī, Seyyed Farīd. 1379Kh. *Tārīkh-e Rāzānānengārī-ye Irān*. 2 vols. Tehrān : Sāzānān-e Chāpva Enteshāāt-e Vezārat-e Farhang va Ershād-e Eslāmī.
- Qāsemeī, Seyyed Farīd (ed.). 1380Kh. *Ketāb*. Tehrān : Nashr-e Markaz.
- Qāsemeī, Seyyed Farīd. 1380Kh. "Mogaddameh," *Ketāb*. Tehrān : Nashr-e Markaz, pp. 3-24.
- Qāsemeī, Seyyed Farīd. 1383Kh. *Avvalīn-hā-ye Maḥbūāt-e Irān*. Tehrān, Nashr-e Abī.
- Reid, Donald M. 1974. "The Syrian Christians and Early Socialism in the Arab World," *International Journal of Middle East Studies* 5/2, pp. 177-193.

- Sadīd al-Saltaneh, Mohammad 'Alī Khān. 1362Kh. *Safarnāmah-ye Sadīd al-Saltaneh*. Ahmad Eghtedārī (ed.), Tehrān: Enteshārāte Behenshar.
- Šadr Hāshemī, Mohammad. 1363 Kh. *Tārīkh-e Jarīyeh va Majallāte-Īrān*. 4 vols, 2nd. ed., Ešfāhān, Enteshārāte Kāmel.
- Sa'dangiyān, Strūs and Kāve Bayāt. 1380Kh. "Gofogū bā Modīr-e Enteshārāte Ebn-e Sīnā," *Ketāb*. Tehrān: Nashr-e Markaz, 39-60.
- Schayegh, Cyrus. 2005. "'A Sound Mind Lives in a Healthy Body': Texts and Contexts in the Iranian Modernists' Scientific Discourse of Health, 1910s-40s," *International Journal of Middle East Studies* 37, pp.167-188.
- Shaffer, Brenda. 2002. *Borders and Brethren: Iran and the Challenge of Azerbaijani Identity*. Cambridge: MIT Press.
- Shīrāzī, Dāvūd Ramazān. 1383Kh. "Etehdādīyeh-ye Nāsherān va Ketābforūshān-e Tehrān," *Ketābforūshī: yāhānāneh-ye Bābāq Ašfār*. Tehrān: Nashr-e Shahāb-e Sādeh, pp. 285-292.
- Siyāsi, 'Alī Akbār. 1386Kh. *Gozāresh-e Yek Zendagī*. Tehrān: Nashr-e Akhtarān.
- Vaziri, Mostafa. 1993. *Iran as Imagined Nation: The Construction of National Identity*. New York: Paragon House

註

(一) [Albin 1986: 1]

モハンマド・フセイン・アリー『書物 Ketāb』

- (2) [Albin 1986: 2-4]
- (3) 本稿では [Qāsemī 1380a] を資料とする。本書には『書物』の本文のほか、いくつかの付録的論文がいつている。それらについては各論文の著者名(著者不明の場合は論文名、資料名)で別に文献として挙げてある。混同を避けるため、以下の記述では『書物』の本文から引用する場合は [Ketāb] と略記する。
- (4) [Qāsemī 1379: vol. 1, 199-202] [Qāsemī 1379: vol. 2, 751-781]
- (5) 代表的な研究書については [吉村 2007: 6-10] に解題があるが、ここでは参考のみ。
- (6) 彼の生涯については、セイヤム・フアリード・ガッセミーによる『書物』の解題 [Qāsemī 1380b] のほか、[Ashdaqatīn Mard-e Īrān 1380] [Etehdād 1380] [Azarang & Dabāshī 1382] [Sa'dangiyān & Bayāt 1380] [Jalālī 1383] に拠った。
- (7) [Eqbal 1383: 103]
- (8) [Sa'dangiyān & Bayāt 1380: 41]
- (9) フットノートは、ギャラク書店、エフラーヒームは、エブネ・スティーナー書店を経営した。モハンマド・ラマザーニーの息子モフセンもパダヴィーデ出版社を経営した。この三名は故人である。シャヴァアードの息子アリー・レザーは現在ベルキヤス出版社を経営している。
- (10) [Ashdaqatīn Mard-e Īrān 1380: 32]
- (11) 一九〇一年、モスクワで政治学を学んだミールザー・ハサン・ハーン・モシーロッドウレによって設立された。

外務省に附属しており、卒業生の多くは同省に就職したと云う [Araie 1969: 32-33]。一九二七年には教育省の管轄下に入り、一九三五年のテヘラン大学創立とともに法学部としてその一部を構成するようになった [Nur-bakhsh 1381: 1548-1549]。

- (12) [Qāsemī 1379: vol. 2, 751]
- (13) [Alāfi 1383: 230-231]
- (14) [Āzarang & Dabāshīr 1382: 91-92]
- (15) [Āzarang & Dabāshīr 1382: 91]
- (16) 『』の雑誌のごく初め [Qāsemī 1379: vol. 2, 755-759] に簡潔な記述がある。『』と『Sadr Hashemī 1363: vol. 3, 66-71』を参照。
- (17) [Qāsemī 1379: vol. 2, 759-761]
- (18) このような形式の小冊子の発行は、その後、タラッキ、グーテンベルグ、アフシャーリーといった書店が追随し、一頃流行したと云う [Sa'dangiyān & Bayāt 1380: 33]。
- (19) [Sadīd al-Saltaneh 1362: 353-571] を参照。
- (20) [Āzarang & Dabāshīr 1382: 92]。なお、『モハンマド・ゴルボンに於ける』彼は教科書の無償提供をも主張したと云うのである [Golbon 1383: 498]。
- (21) 同組合のごく初め [Shirāzī 1383] を参照せよ。
- (22) おそらく、ハーヴァル書店が店舗を構えていた土地の権利問題に関する裁判に関係しているものと推測される。これについては第四部発行後に、『この冊子をまとめて販売する際に付けたと思われる解題 [Ketāb: dād] を参照。
- (23) この規約には、在庫のある書籍は一日以内に、稀覯本は週間以内に用意すること、書籍を大量に購入する者や一括して購入する者には一割の値引きを行うこと、地方に送る場合は書籍の本体価格の一割が郵送料として追加されること(ただし、ハーヴァル書店が出版した書籍については同書店が負担)、印刷本、写本を問わず適正な価格で買い取ること、ペルシア語以外の書籍の売買も行うことなどが記されており、当時の書店経営の実態を示唆するものとして興味深い [Ketāb: alef]。
- (24) [Ketāb: jozve-ye awal 3]
- (25) [Ketāb: jozve-ye awal 3]
- (26) [Abrahamian 1982: 151-154]
- (27) 『書物』の目録に記載されている書物の価格は、無料で配布された書物を除くと、『五シャーヒーから一〇トマンの間である。サイド・ナフィースイーの回想によれば、一九二〇年代前半における召使の月給が五トマン、官僚の月給が一〇トマンであったというから、民衆にとっては書物が安価な商品ではなかったということがわかる [Nafīs 1384: 510]。
- (28) 当時の識字率について正確には明らかになっていないが、一九二〇年代初頭、イラン全体では五パーセント程度、テヘランでは二〇パーセントと推計することができ [藤元 2006: 124] [Martin & Mason 2006: 242]。
- (29) 一九三四年一〇月にはフェルドウスイーの生誕一千年を記念する国際会議が開かれるが、それに合わせてラマーニーは五巻本の『シャー・ナーメ』を出版しようとする

- していた。なお、ハーヴァル書店が出版したこの『シャ
ー・ナーメ』は、内務大臣の通達によって国内の学者た
ちに推奨されたほど優れたものだったという [alāh
1383: 231]°。
- (30) [Shafiq 2002: 48]
- (31) Qāherah という表記が三、Mesr という表記が一であ
る°。
- (32) 政府の管理下にあり、一九一一年以降、議会の建物の
中に移転した [石見 2006: 19]°。
- (33) [石見 2006: 20]
- (34) 各書店の創業者については [Eqbal 1383] を参照せよ°。
- (35) [Ketāb: jozveh-ye dovvom va seyym, 2-23, 33-40]
- (36) [Marzolph 2001: 220]
- (37) ガーシヤール朝期における翻訳事業については [Ary-
ānpūr 1382: vol. 1, 259-260] を参照せよ°。
- (38) [Menashri 1992: 71-72]
- (39) [Āryānpūr 1382: vol. 2, 237-238]
- (40) [Minovi 1383: 348-349]
- (41) 一九世紀にはモリエール、セルバンテス、ルサージェ、
ヴォルテール、テュマ、ヴェルヌ、セギュール、フェヌ
ロンなどが翻訳され、立憲革命から一九二二年までにベ
ルナルダン・サン＝ピエール、シユール、ユゴー、プレヴ
オー、テラーユ、ロテューなど翻訳された [Balay
2001: 154-156]°。
- (42) ただし、本稿で割愛した『アフサーネ』にはこれまで
挙げた人々以外に以下の作家が翻訳されている。フラン
- ス文学ではモンテスキュー、モパッサン、ドレーデ、ミ
ユッセ、バルザック、ドイツ文学ではハイネ、イギリス
文学ではラム、キップリング、アメリカ文学ではオー・
ヘンリー、ポー、アラブ文学ではジュブラーン・ハリール・
ジュブラーン。これによると、モンテスキューやバル
ザックがペルシア語に翻訳されたのは第二次世界大戦
以後であるという記述は誤りである [Balay 2001: 155]°。
- (43) 彼らの大部分は今日では忘れられた作家といえるが、
近年のフランス文学研究の分野では [小倉 2004] のよう
なすぐれた研究が現れている°。
- (44) [Ketāb: jozveh-ye chahārom, 11-14]
- (45) [Ketāb: jozveh-ye chahārom, 15-17]
- (46) [Moshfeq Kāzemi 1350: 58]°。新聞の連載小説はイラ
ンでは「余白小説 romān-e pāvargi」と呼ばれていた [藤
元 2006: 125]°。
- (47) イランにおける「知識人文学」と「大衆文学」の特徴
については [藤元 2006: 121-123] を参照せよ。また、知
識人文学の停滞の原因を彼らによる現実認識と大衆のそ
れとの懸隔や意識的な大衆の排除に求める分析として
[Navabpour 1996] がある°。
- (48) 彼らの文学活動については [Brugman 1984: 210, 218-
224]。社会主義思想については [Reid 1974] を参照せよ°。
- (49) 一九世紀における歴史書の翻訳に関しては [Adamiyat
1971: 149-150] を参照せよ°。
- (50) この点については [Abdi 2001] に詳し°。
- (51) [Ketāb: jozveh-ye dovvom va seyym, 23-26]

- (52) [Katzb: jozveh-ye dovrom va seyyom, 34-35, 45]
- (53) 受容のあり方について一言すれば、ヨーロッパに留学経験のある若者らは、翻訳に頼ることなく、原書に接する機会も当然あったようである。イランにおける近代演劇の先駆者の一人であるレザー・シャフラザードは会話の中でユコー、シユッセ、ヴィーニー、コーナエを引用し、フローベールの『ボヴァリー夫人』や『サランボ』を称賛したという [Moshfeq Kāzemi 1350: 131-132]。フローベールの作品のペルシア語への翻訳は第二次世界大戦後であるというから [Balay: 2001: 155]、おそらく原書で読んだであろう。また、後にテヘラン大学学長となるアリー・アクバル・スィヤースィーは、1911年に国費留学生としてフランスに赴いた際に、モリエール、ラシース、コルネイユ、バルザック、デュマ、ユゴー、シユッセ、ラマルティエヌなどを原書で読んでみる [Siyasi 1386: 57]。
- (54) 軍印刷所は軍事関連の書物だけではなく、文学作品なども印刷している。一九二一年から一九二六年に駆けて行われた軍隊の近代化の編成については [Cronin 1997] が詳しい。また、中央集権化と軍事改革との関わりについては、「八尾師 1998: 49-53」も参照せよ。
- (55) [Nafsi 1384: 191]
- (56) [Cronin 1997: 27]
- (57) [Moshfeq Kāzemi 1350: 197]
- (58) [Moshfeq Kāzemi 1350: 169, 190]
- (59) [Cronin 1997: 241-242]
- (60) [Cronin 1997: 242-243]
- (61) この点についての詳細な議論は [Yaziri 1993] を参照せよ。
- (62) [Afshari 1993]
- (63) 「八尾師 1998: 60-65」
- (64) [Katzb: jozveh-ye avval, 24-25, 31]
- (65) [Katzb: jozveh-ye avval, 30-31]
- (66) [Katzb: jozveh-ye avval, 31]
- (67) [Katzb: jozveh-ye avval, 32]
- (68) レザー・シヤール期における鉄道や道路の建設に伴う国内輸送の発展と輸送コストの軽減に関しては [Clawson 1993] を参照せよ。
- (69) ただし、年鑑の歴史は一八七〇年代にまで遡ることができない。
- (70) [Schayegh 2005: 172-173]
- (71) [桜井 1991]
- (72) [Kashani-Sabet 2005]
- (73) [Moshfeq Kāzemi 1350: 171]
- (74) 考察対象となる年代が限定されているためか、近代イランの経済思想を扱った専論 [Dadkhah 2003] でもこれらの書籍への言及はなご。
- (75) [Katzb: jozveh-ye dovrom va seyyom, 53-56]
- (76) レザー・シヤール期を含めた近代のイランにおける司法制度に関する最新の研究として [Mohammadi 2008] がある。
- (77) [Katzb: jozveh-ye chahārom, 2]

- (7) 個々の作品のあらすじや作者については [Aryānpūr 1382: vol. 3, 224-441] を参照せよ。
- (79) [Moshfeq Kāzemi 1350: 141, 315]
- (80) この場合の「第三階級」とは一般民衆のことである。ラマザーニーの同時代人で書物を通じて深い関わりがあったサイド・ナフィースイーの回想録にもこうした用語は頻繁に出現する。それによれば、第一階級とは貴族や名士層、第二階級は彼のような近代的中間層、第三階級とはそれ以外の一般大衆を指すものと考えられる。例えに [Nāfisi 1384: 618, 636-638] を参照せよ。
- (81) [藤元 2006: 124-125]
- (82) [*Ketāb* : jozveh-ye chahārōm, 34-37]
- (83) [*Ketāb* : jozveh-ye chahārōm, 35]
- (84) もともと「語り物」としての「物語」はこの時期以降も消滅したわけではなく、ナツカール naqqāl と呼ばれた物語師によって語られていた [Marzolph 2001: 217-218]。
- (85) この点については、当時ラシムトの文学青年らと交流のあったサイーム・ナフィースイーの証言 [Nāfisi 1384: 461] を参照せよ。
- (86) このような裁判の一例を紹介したものととして [Ansārī 1383] があゆ。
- (87) [桜井 1999: 51]
- (88) [Honar 1383: 689]
- (89) [*Ketāb* : jozveh-ye dovvom va seyjom, 64]